

令和6年12月第5回真庭市議会定例会 市長諸報告

(令和6年12月3日)

皆様、おはようございます。本日ここに、令和6年12月議会定例会を招集しましたところ、議員の皆様にはご参集いただき、誠にありがとうございます。

それでは、9月定例会での報告以降の真庭市政の主な動きを中心に申し上げます。

(地方創生・物価高騰対策への対応)

石破内閣は地方創生への取組姿勢を強く打ち出し、「新しい地方経済・生活環境創造本部」を設置し、年末までに基本的考え方を取りまとめる方針です。真庭市としても、急速に進む人口減少をいかに抑制し、地域での安心な暮らしの維持のため、主体性をもって取り組まなければなりません。国の制度を有効に活用しながら、真庭市の未来を切り拓くため、市民、行政がともに活動量を高め、市を挙げて取り組んでまいりましょう。

また、先月には賃金・所得増による経済成長と物価高への対応を中心とした総合経済対策が閣議決定されました。真庭市としては、これまでも時宜を得た対策を迅速に講じてまいりましたが、引き続き国の動向を注視し、市民生活を守るため、早急な予算措置が必要な場合は議会と協議のうえ、スピード感をもって対応します。

(第3次真庭市総合計画の策定)

現行計画の策定以降も急速に人口減少が進行し、地域の未来を担う本市の子どもの出生数は昨年初めて200人を下回るなど、厳しい現状となっており、個人の価値観や生活様式は多様化し、AIを中心とした新たな情報技術の普及など、社会環境も大きく変化しています。

第3次総合計画では、こうした変化を見極めながら直面する諸課題に対応し、持続的に発展させる「真庭ライフスタイルの実現」を引き続き目指し、特に、最大の課題である人口減少対策については、自然減対策と社会減対策の両面で、組織を挙げて注力する横断的なプロジェクトを掲げるとともに、若者や女性が活躍できる社会の構築を意識した6つの「推進の柱」からなる計画策定を進めています。議員各位には、先月の議会全員協議会において、素案へのご意見をいただいたところであり、これまで実施したワークショップやアンケートによる市民の声や、今後のパブリックコメントでのご意見などをしっかりと受け止めながら、策定に努めてまいります。

(県立高校再編計画への対応)

市内の幅広い関係者が集まる「真庭の高校の未来を考える会」で議論し、決定した県と県教育委員会への要請文を、私や小田市議会議長、高校同窓会の代表者等が10月に県庁を訪問し、県知事と県教育長あてに提出し、拙速な再編整備を進めないよう求め、先月開催した2回目の会議では、岡山県議会へ再編整備に関する請願書の提出を決定し、11月定例県議会へ提出しました。

また、8月に発足した美作県民局管内10市町村の首長と地元選出県議による連絡会議でも、先月の意見交換会の中で、管内県立高校存続に向けた県に対する要請について議論し、会として要請文の提出も検討しており、さらには、県内27自治体の全首長が

参加する「県立高等学校の在り方を考える会」では、今月、先進的な高校魅力化等に取り組む島根県雲南市と飯南町を訪問し、自治体担当者等と、県立高校の在り方について意見交換を行う予定です。

高校は、単に教育の場だけではなく、地域の未来を拓く地方創生の核となる存在です。地元の理解と合意のもと、周辺自治体等とも一丸となって、引き続き設置者である県への働きかけを強め、市内の中等教育の環境を守っていくとともに、市としてもできる限りの支援を行い、選ばれる高校となるよう、一層の魅力化を進めてまいります。

(旧久世校地利活用の検討推進)

跡地所有者の岡山県と、先行実施する個別事業ごとに財産の使用貸借を受けるなど基本的事項を定めた協定書を10月に締結したところであり、引き続き、民間企業へのサウンディング型市場調査を進め、県とともに関係団体等と調整しながら進めてまいります。

(市制 20 周年)

ご承知のとおり、来年3月31日に市制20年を迎え、この20年のあゆみをまとめる「記念誌」の製作に着手しています。また、この節目を市民皆さんとともに祝い、人口減少の中にあっても、真庭市を永続していく決意を新たにすべく準備を進めています。

それでは、市政の現状と最近の成果、今後の取組について、その主なものを報告いたします。

1つ目は、地域みんなで子育てを応援する「こどもはぐくみ応援プロジェクト」です。 (こどもはぐくみ応援プロジェクト 2024)

主な事業の進捗ですが、ワークライフ・バランスと子どもを産み育てる環境づくりを当事者視点で対話する「こどもまんなか子育て座談会」や、子育て世代を中心にみんなで楽しめる「こどもまんなかまつり」を開催し、地域ぐるみで子育てを支援する意識醸成に努めています。先月には、こどもの遊ぶ機会をつくるイベント「おそと de あそぼ」を市役所駐車場で実施し、市民による“あそびのわ”づくりも進んでいます。今月末には高校生と大学生による「こどもまんなかユース座談会」を開き、若者の意見を積極的に施策に取り入れてまいります。

また、市民が自主的に運営する「地域食堂」では子育て家庭や高齢者など幅広い世代が交流し、男性の育児休業取得や職場環境の充実に取り組もうとする企業も増えており、それぞれの立場から、子育てをみんなで支える風土が根付きつつあります。

(学校教育の取組)

児童生徒に1人1台配備したデジタル端末の日常使いが定着し、昨年度から順次、各教室に整備を進めている大型モニターも積極的に活用されています。10月に川上小学校で開催された第73回全国へき地研究大会岡山大会でも、端末を効果的に活用し、子どもたちが郷土愛を育む取組を発表するなど、授業における教育dXが加速しています。

昨年度から市内全校がコミュニティスクールとなり、今年度、中和小学校は児童の発

案で地域の夏祭りに盆踊りを復活させ、また、北房の学校運営協議会は卒業生である市内の高校生を招き、若者と共に対話により地域の未来を考えるなど、各校での活発な活動が進んでいます。

(学校給食への支援)

学校給食は、子どもたちの心身の健全な発達と食に関する理解と判断力を養うためのものであり、学校給食法にも定められた学校教育の一つです。子どもの命を支える「食の権利」は、家庭や地域、自治体、国といった社会全体で支えていくものであり、市内すべての給食運営委員会等でも保護者から同様の意見をいただきました。子どもの命と生活を守る責任を負うのは、第一に保護者ですが、これまでも保護者に過重な負担が生じないように就学援助や物価高騰対策を講じ、この間保護者の負担増をしていません。

学校給食費の無償化についてですが、事業の性格上、実施するのであれば、国の責任において財源を明確にして実施すべきものと考えます。多額の費用も必要であることに加え、財政が豊かな自治体や小規模自治体なら実施できることにすると、自治体の財政力格差が子どもたちの育ちの格差を生むこととか、地方交付税の配分がおかしいという議論になります。現にそんな声が出つつあります。なお、人気取りの政策に利用されるきらいもあります。このようなことは望ましいことではなく、子育てと教育の問題、国民財源負担の問題として議論を深め、全国市長会などの場で訴えてまいります。

なお、次年度の学校給食費については、現行の保護者負担を増加させることのないよう、1食当たり20円の支援をさらに拡充する暫定措置を検討しています。

(高校教育魅力化の推進)

真庭高校では、経営ビジネス科3年生による竹パウダーの活用アイデアが、「全国高校生ビジネスアイデアコンテスト」で最優秀賞と文部科学大臣賞をダブル受賞し、他のコンテストでも受賞する嬉しい出来事がありました。また、同科2年生が活動拠点として市内にカフェ「ma・chi・e(マ・チ・エ)」を10月にオープンしたほか、農業実習の現場では、大阪大学との波長選択型太陽光発電の実証事業の一環として、実証内容を学ぶ生徒向けに研究開発者の講演会を予定するなど、最先端農業にチャレンジする機会を創出しています。食農生産科と経営ビジネス科1年生が実践中の起業家育成プログラムでは、地域課題を解決する11のビジネスアイデアが生まれ、社会実装につながるよう支援してまいります。

勝山高校では、勝山校地の生徒が「森の芸術祭」にあわせて勝山地区にちなんだスイーツメニュー4品を開発し、勝山文化往来館ひしおで来場者をもてなしたほか、蒜山校地では、秋のオープンスクールに県内外から約30人の生徒が訪れ、新たなカリキュラムや寄宿舎が関心を集め、生徒募集の反応も堅調です。10月の「国民スポーツ大会佐賀2024」では、馬術部の生徒が輝かしい成果を上げており、校地の魅力を高めています。建設中の学習交流センターは内装工事に着手し、次年度の新たな交流の場づくりに向け、地元団体と協議を進めており、こうした情報は新設するホームページで紹介します。

生徒や学校、地域のこうした努力は高校の魅力を一層高めます。市内各高校のオープンスクールでは、今年度から夏に加えて10月にも開き、先月は、高梁城南高校との合同イベントで県北4校の魅力を県南の中学生へアピールし、生徒の獲得に取り組んでい

ます。市内3校地が連携して希望する生徒の海外留学を支援する全国的にも珍しい取組も検討されており、今年創設した「ゆめ学び創造基金」を活用し、生徒のチャレンジを全力で後押しします。真庭の高校は元気です。この場から、市内高校への進学を強く呼び掛けるものであります。

(結婚推進)

真庭市縁結び推進委員が先月までに開いた3回の婚活イベントには、市内外から49人の参加があり、地元の方の協力もあって6組のカップルのマッチングにつながったところであり、今後も引き続き、出会いの場の創出を支援してまいります。

(図書館の充実)

図書館も元気です。9月に初開催した「お泊り図書館」に参加した24名が夜の図書館を満喫しました。また、先月から大学講師を招いた講演会を開き、市民の知的探求に応える「学びの場」を目指し注力しています。こうした図書館を拠点とした取組が評価され、先月、NPO法人知的資源イニシアティブが主催する「Library of the Year 2024」で優秀賞を受賞しました。図書館は知の宝庫です。新しいつながりや学びを生み出す場としてさらに輝く図書館にしましょう。

2つ目は、自分らしく暮らせる「共生の地域社会まにわ」の実現です。

(SDGs・共生社会の推進)

SDGsを実践する人材育成を図るため、SDGsパートナーや市民を対象とした「SDGsミーティング」の開催を増やして取組を強化し、その成果を2月に開催する「SDGs円卓会議」で発表する計画です。また、市民が主体となり、共生社会への理解や専門的知識を深める「対話カフェ」を9月から開催しており、誰一人取り残さない社会の構築に向けて、引き続き対話の場づくりに努めてまいります。

(自然との共生)

蒜山自然再生協議会による蒜山高原鳩ヶ原草原や周辺湿原での取組が、環境省の「民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域」として県内2例目の認定を受けました。これをきっかけにマッチングした企業と「蒜山地域・自然共生サイトの自然再生に関する協定書」が締結され、同企業から2030年度までの継続支援も新たに受けられます。協議会の取組はNHKの番組で全国にも紹介され、今後の活動の広がりを期待します。

また、来年の「大阪・関西万博」に向けて、蒜山をはじめ全国の「茅」の産地との連携を進めており、今年度、阪急百貨店とともにGREENableの自然共生のコンセプトを活用したPRイベントを実施するほか、次年度には万博会場内の「フェスティバル・ステーション」で、茅・草原の持つ価値を最大化するイベント開催を調整しています。

こうした取組に加え、真庭の豊かな自然環境や景観との調和を図るため、ソーラーパネルなど再生エネルギー関連施設の設置を制限する条例に、急速に普及が進む「大規模蓄電施設」を加える改正を今定例会に提案します。

(協働推進・地域自治)

地域自主組織や市職員などを対象に、先月、一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所の藤山所長を講師に、新しい地域運営の仕組みと行政のサポート手法を学ぶ講習会を開催しました。市民、行政がともにこのような学びを実行に移し、地域自治の前進とU・Iターン者の獲得を実践してまいります。

(障がい者週間等の取組)

10月に白梅総合体育館で開催された「第10回真庭地域ふれあいスポーツフェスティバル」には、市内の障がい者施設や事業所の利用者、スタッフを中心に約120人が参加して交流を深めました。また、本日から9日までの「障がい者週間」を契機に、障がいへの理解促進に向けて集中的に取り組めます。これに先駆けて一昨日の「こどもまんなかまつり」に参加したこどもを対象に、手話を用いた紙芝居を行ったほか、期間中は市内図書館や「ふるいちマンガ館」でも関連図書や漫画を展示します。市役所本庁舎内では障がい者の作品展示と就労継続支援事業所の物品販売を、明日は市職員向けに研修会を実施するなど、様々な取組で障がいへの関心・理解を深め、障がいのある人があらゆる活動へ積極的に参加できる社会を目指してまいります。

(真庭市健康づくり月間の取組)

アプリを活用した市民の健康づくりを促すため、10月に実施した事業所や仲間などのチームで歩数アップに取り組む「まにわ大運動会1日プラス1,500歩」には、昨年より8チーム多い上限の130チーム、390人が参加し、まにわ健康機能の登録者も約1万3,500人まで増え、市民の健康意識が高まっています。また、アプリ以外にも、真庭市食育・健康づくり実行委員会と連携した「健康づくりチャレンジ30日」には、市民の約1割が参加するなど好評であり、市民に身近なアプリとして価値を高めるこうした取組を引き続き進め、健康づくりを推進する団体との連携も一層強めてまいります。

3つ目は、市民とともにつくる持続可能な地域づくりです。

(公共交通の維持・存続と利便性の向上)

姫新線の維持・存続に向けて、今年7月に取得したJR西日本の株式で得た配当金は市民へ還元することとし、利用を促進する補助制度や来年3月の姫新線中国勝山駅開業100周年記念イベントなどに活用していく予定であり、また「株主優待券」の活用も検討しています。開業イベントはJR西日本の協力を得て、式典や記念列車を運行するほか、従来の駅前マルシェも開催します。加えて、高校生の意見を取り入れ整備している真庭市産材を活用した「BeLIN」による駅舎空間の完成をイベント当日に披露し、まちの魅力を高めるとともに、高校魅力化にもつなげてまいります。

実証運行から10月で1年を迎えた「チョイソコまにわ」の利用者は順調に増加し、先月末時点で登録者1,346人、利用件数も運行開始から延べ7,581件、月平均約580件となっています。引き続き、利用効率の改善やスポンサー獲得など経営改善に努めるとともに、生活交通のデマンド化を市域全体に広げる検討を進めてまいります。

森の芸術祭に合わせて、土・日・祝日に蒜山まで延伸した高速バス勝山線は、延べ200人程度が直通便で蒜山へ訪れており、さらなる利用促進策を運行事業者と検討してまいります。

(交流定住・住宅施策の取組)

市の移住相談を担う交流定住センターが、情報発信サイト「マニコレ」や「ココマニワ」を精力的に活用し、アクセス数は昨年比約5千件増え、相談件数も128件で、10世帯19名の移住につながっています。

真庭なりわい塾は、今年度、中和地区で7回の基礎講座が、北房地区で6回の実践講座が開かれ、塾生が農山村の暮らしを肌で感じ、実践を通じて生き方を学んでいます。本市の魅力や豊かな地域資源の発信を通じて、引き続き移住者の増加につなげてまいります。

こうした取組により移住してきた方を含め、若者、子育て世帯等が住みやすい住環境を整備するため、現在、市の遊休地活用に向けた民間事業者への聞き取り調査などを進めており、今年度策定する住宅施策のマスタープランとなる「住生活基本計画」や、空き家の利活用を促進する制度の拡充などと併せ、スピード感をもって対応してまいります。

(まにこいんの普及促進)

8月から9月にかけて実施した利用促進キャンペーンは、昨年実施したものに比べ利用金額が増加し、さらに、「森の芸術祭」期間に合わせて10月から先月末まで実施した応援キャンペーンでも、事業者側から消費者への働きかけが見られるなど、市民と事業者向けの2つを同時に実施したことによる効果を見せています。また、アプリを活用した複数のアンケート調査でも、利便性が高まったことで従来の紙利用の方法より多くの回答があり、集計効率も上がるなど、通貨利用以外の有効性もみられました。マイナンバーとの連携基盤も来月には構築できる見込みであり、スーパーアプリ化による多様な活用の可能性を検討してまいります。

(防災対策)

能登半島地震の復興途上にある奥能登を襲った9月の大雨で、孤立集落の発生が問題化しました。災害時に孤立の可能性がある地域が多数ある真庭市においても、自主防災組織や消防団とも協力しながら対策を強化します。冬期の雪害対策に向けては、ひるぜんベアバレースキー場で昨日実施されたネクスコ西日本による大雪対応訓練に市も協力したところであり、来月には岡山県地震対応訓練に参加するなど、平素から緊張感を持ち、災害対応に備えてまいります。

(久世地域の公共施設の最適化)

久世体育館は、複合的機能を備えた新たな施設を北町公園内に整備することで具体的検討を進めていますが、久世公民館については、老朽化や耐震不足のため令和7年度末に旧久世校地に仮移転する予定であり、最終的には、利用者の利便性を考慮して本庁舎敷地内に公民館以外の機能も含めた複合施設として整備する検討を開始します。

(学校部活動の地域連携・移行)

休日の学校部活動の地域移行に向けた実証事業として9月の土日から地域クラブの活動日を設け、スポーツ活動は「陸上競技」と「バドミントン」を、文化活動は「吹奏楽」を来年2月まで取り組み、中学生のスポーツ・文化活動の場づくりを地域と連携して進めてまいります。

(森の芸術祭)

期間中、県北 12 市町村エリアでは多くの関連イベントが開催され、各地の展示作品へアクセスする臨時列車や周遊バス等を運行して公共交通の不便さを補うなど、関係機関の一体的な取組により延べ約 52 万人と多くの方を迎え入れ、県北一体は盛況でした。市内では、主会場のグリーンブル蒜山に約 1 万 4 千人の集客があり、勝山町並み保存地区では、先日「文化功労者」にも選ばれた真庭市ゆかりの建築家、妹島和世さんの展示作品が、訪れた約 5 万 2 千人の人々を楽しませました。期間終盤にはバイオマスを題材にした野外演劇公演「バイオマス・マクベス」が真庭産業団地で開催され、芸術作品を通じた真庭市の発信もできたと考えています。また、芸術祭の推進組織「MANIWA BAUM」による鉄道路線「南勝線」を空想した取組や、市民団体による「久世芸術祭」、レーシングカーが疾走する「真庭速祭」など、多くの方の手で企画された活動によって新たな交流や資本が生まれました。真庭市では来年度もこの芸術活動を継続するとともに、「森の芸術祭」がトリエンナーレで開催されるように各方面へ働きかけてまいります。

(振興局の取組)

蒜山地域では、長年開催してきた「蒜山高原マラソン」の運営を見直し、今年度から新たな組織が企画した「白樺の丘」を発着点とするコースを 614 名のランナーが駆け抜けました。自然牧場公園での野外音楽ライブや「津黒いきものふれあいの里」でのオーガニックマーケットなど市民の手で企画されたイベントも開かれ、観光振興にもつながる新たな担い手も生まれています。また、昨年から休場中の津黒高原スキー場については引き続き休場とし、今年度末で廃止する方向で調整を進めてまいります。

北房地域では、西の明日香村コンソーシアムが、谷尻遺跡発掘調査から 50 周年を記念した特別展を北房ふるさとセンター開館 40 周年とあわせて開催し、出土品が地元へ里帰りしています。また、地元の児童生徒が、地域資源を活かした古里の魅力発信に向けた学習を同志社大学の支援を受けて継続的に取り組んでおり、年明けには地域住民へ成果発表を予定し、こうした文化遺産を活用したまちづくりや、大学と連携したこどもたちへの郷育を引き続き進めてまいります。

落合地域では、9 月に開かれた「落合まちかど展覧会」の 27 会場に市内外から約 4,500 人の来場があり、出展者との文化交流の場となっています。モルックやダンスの大会が行われた「おちあい元気フェスタ」では、地元有志が立ち上げた実行委員会が企画・運営し、食とスポーツでこどもからお年寄りまで楽しめる秋の 1 日を提供しています。地域が主体となった継続的な取組を、今後も支援してまいります。

久世地域では、森の芸術祭の関連イベント「久世げー」の企画として、久世河川敷のスケボーパークに描かれた日本最大級のミュールに多くの子供連れの客が集まり、若者がアーバンスポーツを楽しめる場所として、今後も積極的に活用されることを期待します。また、今年度、地域内の各小学校は創立 150 周年を迎え、先月末には遷喬小学校在校生が主人公になる特色ある式典を盛大に行うなど、各校の様々な記念行事により賑わいをみせています。あわせて、久世駅前通りの早川代官像を修繕する調査費用を今定例会に提案し、地域のまちづくりを進めます。

勝山地域では、募集した「旭川河川公園」の愛称が、158 件の応募の中から「勝山ス

トリートパーク川夢(RIMU)」に決定し、先月のオープニングイベントは地域の小中高校生や市内外の団体の協力により盛り上がりました。「水夢」とも連携し、若者の歓声が絶えない公園になることに努め、高校の魅力化にもつなげます。また、運営者が決まった「郷宿」では、来春の一部開業に向け、岡山県立大学の学生の協力を得ながらコワーキングスペース整備に着手し、勝山町並み保存地区の交流拠点として整備を進めています。

美甘地域では、地域の歴史や文化を学ぶ地元児童が、美甘文化祭で初展示した「手まり」づくりや、保存会の協力で高田城の出城跡「麓城」に登るなど、地域の文化や歴史に触れ、郷土愛を育む取組を進めています。また、住民の移送や生活支援、空き家の管理等に取り組む地域グループによる移住支援が徐々に成果を見せており、住民同士で支える生活支援の仕組みづくりに向け、地域内で検討を始めています。

湯原地域では、郷土野菜「土居分小菜」の継承に向けて、二川ふれあい地域づくり委員会など地元住民とノートルダム清心女子大学の学生が協力して栽培やレシピ開発に取り組み、先月開かれた地域イベント「ふたかわミライエ」でオリジナルメニューを販売しました。また、湯原文化祭の特別企画展「湯原ダム 70 周年」では、建設当時の写真やダムにまつわる地域変遷等が紹介されるなど、ダムとともに歩んできた地域のこれまでとこれからについて考えるきっかけになっており、こうした地域住民の主体的な活動を引き続き支援してまいります。

4 つ目は、未来に向けた「回る経済」の推進と脱炭素への挑戦です。

(生ごみ等資源化プロジェクト)

9月から試運転中の「まにくるーん」は、来月から本格稼働に移行し、廃棄物処理に係る料金体系も、資源は無料になり、生ごみも分ければ「資源」となります。市民の皆様には改めて、「分別」へのご理解とご協力をお願いします。環境にも家計にもやさしいまちづくりを一緒に進めていきましょう。

この取組を契機としたインドネシア共和国マカッサル市との都市間連携事業として、10月にマカッサル市職員やハサヌディン大学教授が本市を訪れ、岡山大学を交えて今後の取組について意見交換したところであり、年明けには副市長も現地に赴き、未来を担う人材の交流など取組の幅を広げる協議を進め、有益な国際交流へと発展させてまいります。

(ゼロカーボンシティ実現に向けた取組)

公共施設への太陽光発電設備の設置事業は、9月から新たに5施設への給電を開始し、引き続き二酸化炭素排出の削減や再生可能エネルギーの積極導入を推進していきます。電気の地産地消の実現に向けた地域新電力会社については、出資候補者による意見交換や発起人会を重ねており、事業計画や運営体制が整い次第、早期に設立したいと考えています。

(回る経済の推進)

シェアオフィス「蒜山ひととき」で、地域の魅力発掘と課題共有を目的に9月に開催した「蒜山アクションツアー」に20名のクリエイターが参加し、現在、提案された10名のビジネスアイデアをフォローアップしています。ビジネス創出をきっかけに

「ひととき」の利用につなげるとともに、同じく隈研吾氏が設計監修した岡山市や吉備中央町のコワーキングスペースとの連携に向けた協議も進めており、利用しやすい環境も整えてまいります。

また、10月に開始した、地域資源を生かし新たなビジネスを創出する支援プログラム「カルマニ」にエントリーした市内9社、市外12社のマッチングで組成した4チームが、新規ビジネスの開発に取り組んでいます。インターン参加の高校生10名も積極的に関わりながらビジネスアイデアの発表準備を進めており、こうした地域内外の様々な智恵や発想をビジネス創出に生かしてまいります。

(真庭産ぶどうの推進)

蒜山農業公社が蒜山で育成してきたオーロラブラック、ピオーネ、シャインマスカットは今年度から本格出荷を始めました。10月には朝どり直送のオーロラブラックの販売会を大阪市内の阪急うめだ本店で開催し、関西圏域中心に販路拡大を図り、産地をPRしてまいります。なお、流通、集出荷体制に課題もあり、今後の出荷量増加を見据えながら、ぶどうの付加価値を向上させ、生産者、JA、県、真庭市で課題解決に取り組みます。また、この秋から、同公社を「担い手研修受入組織」として研修生の募集を開始したところであり、温暖化の影響を受けにくい北部地域の強みを生かした「ぶどうの産地化」と「担い手育成」を強めてまいります。

(鳥獣害対策)

シカの生息域拡大によって深刻化する農作物や再造林地の被害対策として、森林環境譲与税を原資にIoT(Internet of Things)技術を活用した捕獲実証業務を、鉄山地域の実証林で開始しており、駆除班員の見廻り負担の軽減や効果的な監視、捕獲技術の普及促進を図りながら捕獲圧を強化してまいります。こうした取組と併せて、植栽地への対策として、防護柵の設置方法を学ぶ研修会や市有林内における防護施設の耐久性、コスト、適地性を検討する実証林を岡山県と連携して設置したところであり、効果的な防護対策を普及させ、再造林の推進を図ってまいります。

(森林保全の取組)

皆伐や再造林など、真庭市における持続可能な森林経営の管理体制強化に向けて検討してきた市有林を核とした新たな「受け皿づくり」については、近年、ウッドショックにより高かった国産木材需要が一転して低調となったことや、シカ被害拡大に伴う対策コストの増加などもあり、想定していた組織体制の構築や運営が困難となりました。このため、地元事業者との協業を目指すことが現実的と判断し、現在、その推進体制や役割分担等の検討を進めているところです。協業する中で、引き続き、核となる市有林の適正整備や周辺民有林を一体的に整備する体制づくりに取り組んでまいります。

市民サービスと事務事業の改善

(人材確保・職員採用)

今年度、市職員の採用試験の内容見直しや「高校生枠」の新設、保育士への支援制度拡充など受験者獲得に向けて工夫し、前期・後期・高校生枠合わせて延べ約90名の受験申込みがあり、とりわけ保育士の申込みは昨年度から6名増加しました。人材確保が

厳しい中、子育て応援やバイオマス利活用といった、本市の持続可能なまちづくりの取組に魅力を感じる受験者も多く、引き続き市の魅力を発信しながら、あらゆる発想と手段で人材確保に努めてまいります。

(日直の見直し)

効率的な市民サービスの提供と職員のワークライフ・バランスを確保するため昨年度から見直しを進めてきた日直業務については、来年4月から本庁舎と蒜山振興局の2庁舎に集約します。新たに火葬場予約システムを導入することにより市民の手続きに要する時間を短縮し、届出者の負担軽減を図ります。

(電子契約サービスの導入)

次年度からインターネットを活用した「電子契約サービス」を新たに導入し、来月から試行運用を開始します。契約手続きに要する時間短縮や契約書の郵送料、用紙代等の削減効果に加え、受注者は「印紙税」が不要となるメリットもあり、サービス導入により事務の効率化と利便性を高めてまいります。

以上、市政運営の状況について、主なものをご報告しました。なお、今定例会では、報告1件、専決1件、条例や補正予算議案など16件、総数18件のご審議をお願い申し上げます。

また、諸議案の内容については、日程に沿い順次説明しますが、慎重な審議のうえ、適切な議決を賜りますようお願い申し上げます。開会にあたっての挨拶と業務の報告とさせていただきます。